

## 「重い皮膚病者をいやす」

2015年05月21日

ルカによる福音書 5章12節～16節。 イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。イエスは厳しくお命じになった。「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」しかし、イエスのうわさはますます広まったので、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気をいやしていただいたりするために、集まって来た。だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。

主イエスがある町におられた時、全身重い皮膚病に罹った人が主イエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。「重い皮膚病」は口語訳聖書では「らい病」と訳されている。「らい病」は不快用語で、今日では「ハンセン病」と言われている。原文のギリシア語の「レプラ」は皮膚疾患全体を指し、「重い皮膚病」という訳が正しいであろう。しかし当時、この病気は感染することを恐れられ、ハンセン病と同じように見られていた。レビ記13章45節、46節に「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、『わたしは汚れた者です。汚れた者です』と呼ばわらねばならない。この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない」と規定されている。人に近づき、交わることが許されない。上記の重い皮膚病者は主イエスに近づき、いやしを懇願した。明らかに律法違反である。彼は病気の苦しみと深い孤独の中で、律法を侵してまでも、主イエスのいやす力に必死ですごったのである。すると、主イエスは手を伸ばし、彼の体に触れた。人は皆、病者が近づくと「向こうへ行け」と罵声を浴びせかけ、石を投げつける。しかし主イエスは、侵された皮膚に触ってくださいました。その手はどんなに温かかっただろうか。苦悩を理解し、分かち合ってくださいる行為に深い慰めを得ただろう。そして「よろしい。清くなれ」と宣言された。すると、重い皮膚病は即座にいやされた。現在の私たちには、どのようにいやされたのか分からないが、福音書は私たちの疑問にお構いなしに、主イエスの力あるいやしを伝えている。

主イエスは彼に「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい」と言われた。レビ記14章に、重い皮膚病がいやされた時は、祭司に見せ、定められた献げ物をし、いやされたことを証明しなさいと規定されている。共同体に復帰できるのである。

ハンセン病は不治の病であったが、1943年に特効薬プロミンが開発され、治る病気になった。だから、聖書にある「重い皮膚病」はハンセン病でないということである。主イエスによっていやされた彼は共同体に復帰できたのである。人間回復をどんなに喜び、主イエスに感謝したであろうか。口止めしても、主イエスのうわさは広まり、大勢の群衆が集まり、教えを聞き、いやしを求めた。ガリラヤは神の国の恵みに満ち溢れたのである。

福音書は遠い昔の不思議な奇跡を伝えているが、誰の手も届かない私の病に、主イエスは手を伸ばして触れ「よろしい。清くなれ」と言って、いやし、立たせてくださる出来事を経験する時、「アーメン」と承服できるのである。